

年 頭 所 感 所 長 星 合 正 治

題は年頭所感とあるが、いま筆を執っている現在は歳末である。余すところ、本年もあと10日許りしかない。おのずから、何が書けるか知らないけれど、到底、歳末雑感の域を出でまい。新年号の巻頭にのせるものは、やはり屠蘇を祝って、雑煮を戴いて、一応気分が改まってのんびりした処で、明窓浄机に向い、一年の大計をそこはかとなく頭に書きながら、おもむろに物すべきであろう。それが理想である。ただし、そうすると、新年号には到底間に合うまい。如何となれば、間もなく、屠蘇機嫌の仲間達がやってきて、当分の間は、明窓浄机もへちまもなくなるのが定例だからである。

○

うちの研究所も、明ければやがて創業6周年を迎える。お蔭で研究の土台もだんだんできてきたようである。それだけに、金の要る研究が次第に数を増してきた。何とかしたい。何とかしなければならぬ。金、金、金。デフレ歳末の雰囲気にも包まれたせいかも知れないが、金のことがしきりに脳中を去来する。そうしている内に、「金」と「研究」との関連性がいろいろ頭に浮んできた。

(1) 金さえあれば物に仕上がる研究、(2) 金があるだけではできない研究、(3) 金がなくてはできない研究 (4) 金の額に比例して実効の挙る研究、(5) 金のかかる割に実効の挙らぬ研究、(6) 金をつぎ込むと著しく進展する研究、(7) 金が物をいう研究、(8) 金に物をいわせる研究、(9) 金に糸目をつけぬ研究、(10) 金と相談づくの研究、(11) 金と相談づくではできない研究、(12) 金が欲しくてする研究、(13) 金を喰う研究、(14) 金が湧いてくる研究、(15) 金を貰い易い研究、(16) 金を貰い難い研究、(17) 金を貰っては困る研究、(18) 金を貰っても困る研究、(19) 金を貰わないと困る研究、(20) 金を貰いたくてするのではない研究、(21) 金がなくてもできる研究、(22) 金のない方ができる研究、(23) 金があっても無くてもできる研究、(24) 金があってもなくてもしなければならぬ研究、(25) 金を是非ともつぎ込みたい研究、(26) 金を何とか工面してしたい研究、(27) 金があってもやりたくない研究、(28) 金があればやりたい研究、(29) 金を得てから考える研究、(30) 金に引きずられる研究、(31) 金を貰っても手のつかない研究、(32) 金がなくてしない研究。

まだあるかも知れないが、思いつくままに並べてみた。順序はもちろん不同。番号を入れたのは、後で一寸註をつけたかった為である。

○

思いつくままに、「金」と「研究」の間に文字を埋めてできあがったものを読み返しながらか、考えてみた。どの句もどの句も、間に入れた文字には、一つとして同じものが無い積りで拾った積りであるが、読み返してみると、同じことをいっているように思える句もある。も一度読み返してみると、少し意味が違うようでもある。それはそれとして、そうした内容の研究には、実際どんなのかあるかしら。(9)を読むと、直ぐ、話に聞くアメリカの研究が思い出される。羨しい。(21)は、古くから、常日頃、折にふれて、頭の中に浮んだり消えたりしていた。(12)などは、如何かと思うが、他への研究費にその幾分を廻したいまぎれに、つい引き受ける受託研究などに、必ずしもそうした例が無いとはいえない。(27)には、近頃どうかすると出会うことがあるようである。(24)の如きは、現在の本邦として、例えば航空関係の研究などが、ややこれに該当しよう。(7)、(8)、(9)、(10)、乃至(29)、(30)、等々は、われわれに縁が無い。(14)番については、苦しいいまのわれわれの生活を体験するにつけても、その成果を海外に出して、などと、夢想することがある。

その内でも、纏まった金さえあればと思う。(1)に該当する研究や、その他、(6)、(25)、(26)等に当るものは、近頃、うちの研究所での研究の中にも、いろいろ生れてきて、部内のやりくりだけでは、どうにもならなくなってきた。苦しい。同時に嬉しい事ではある。

○

地味な研究がある。派手な研究がある。余程努力をしないと其の真価を人が知ってくれない研究がある。世間がまず騒いで気がついて始める研究がある。人様とのお附合いでする研究もあり、自分一人楽しんで、それでよい研究もある。

その内でも工学関係の研究は、多くの場合、われわれの仲間が利用してくれなければ役に立たない。その研究の成果で、まず身近な同胞の生活を実質的に少しでも豊かにするのが第一の目標である。自分一人だけが満足したり、逆に、自分の国の人達より先に、外国の人を楽しませるようなものは、取り敢えず、二の次、三の次のこととしたい。狭量と笑わば笑え、住はもとより衣食にもとかくに事を欠く現在のわれわれは、特に歳末において、こう云い切つて差支えなからうと思う。これが、「年頭所感」の題を眺めながら、何とはなく始めて、やはり行く処に行きついた、今現在の、小生のいつわらぬ歳末の感想である。(29・12・19記)